

「男は背中を語る」

山崎  
力

登場人物

眞野	(24)	会社員 (S E)
三原涼子	(33)	眞野の上司
塩釜	(69)	電車の乗客
前菌	(67)	電車の乗客
千葉みなみ	(24)	眞野の同期
三原りか	(4)	涼子の娘
榊原	(51)	営業部部长
和久	(42)	営業部部长
女性1		
女性2		
その他		

○A 駅・駅員室（夜）

椅子に座り、泣く女性 1。

部屋の隅、女性駅員 A・B に囲まれる

眞野（24）。

眞野「だから違うんです！」

駅員 A「皆一言目は否定するの」

眞野「信じてください！」

駅員 B「二言目は同意を求める」

女性 1 の足元に取れたヒール。

女性 1「急を取れて。その場にしゃがみこん

だんです。そしたらこの人が後ろから」

駅員 A「卑劣」

眞野「体調が悪いのかと思って声を」

駅員 B「かけようとしたように見せかけて後

ろから抱きついた？」

眞野「躓いたんです！ホームの切れ目に！」

駅員 A「切れ目？」

眞野「ちよつと段になってて」

駅員 B「ああ」

眞野「なってますよね？」

駅員 A 「反省の色なし」

駅員 B 「歴代最低の言い訳」

女性 1 「変態」

眞野 「信じてください！」

○同・ホーム（夜）

帰宅ラッシュのホーム。

疲れた様子でベンチに座っている眞野。

その両脇に塩釜（69）と前薊

（67）も座っている。

眞野 「ほらあそこ、切れ目」

塩釜 「ありますね、切れ目」

眞野 「見てもないのに」

塩釜 「まあまあ」

眞野 「だから女性って苦手なんです」

前薊 「苦手」

眞野 「どうしてでしょう？」

塩釜 「どうしてとは？」

眞野 「女性ってなんで強くなるんでしょう？」

塩釜 「ふむふむ」

眞野 「女性の上司なんか僕をゴミのように」

前菌 「ゴミか。それはきついな」

眞野 「どこが男女平等だよって感じですか。あ

あ、すみません。つい愚痴を」

塩釜 「いえいえ」

眞野 「本当にありがとうございます」

前菌 「礼など不要だ」

眞野 「お二人の証言で解放してもらえたので」

前菌 「見てない」

眞野 「見てない？」

前菌 「見てはないが」

塩釜 「その方、切れ目に躓いてましたよ」

前菌 「どんくせえよな」

塩釜 「ですが不慮の事故です」

前菌 「と言ってやった」

眞野 「どうして……？」

眞野をじっと見る塩釜と前菌。

眞野 「お二人はどちら様で？」

二人の視線に妙な威圧感を感じる。

眞野、立ち上がり、逃げようと。

眞野「……ぼ、僕はこれで」

塩釜と前菌、眞野の両脇を抱える。

眞野「！」

○走る各停電車（夜）

○各停電車（夜）

座席に座っている眞野。

その両隣に塩釜と前菌。

眞野「どうして各停に」

塩釜「各停しか停まらない駅なんです」

眞野「ど、どこに？まさか誘拐」

塩釜「わざわざ公共交通機関で？」

前菌「アホか」

眞野「アホって」

前菌「来るんだ」

眞野「来る？」

前菌「任せておけ」

塩釜「私たちを誰と？」

眞野「……誰ですか？」

アナウンス「女子大前です」

○女子大前駅・ホーム（夜）

電車のドアが開き、女子大生たちが一斉に乗車していく。

○各停電車（夜）

十人ほどの女子大生の一団が眞野たちの正面の席を陣取る。座っている女子大生もいればつり革に掴まっている女子大生もいる。

眞野「わお」

真剣な表情で前の女子大生たちを見る  
塩釜と前蘭。

眞野「何をするんですか？」

首や指をゴキゴキ鳴らす二人。

眞野「（慌てて）あのちよっと！」

塩釜と前蘭、背筋を伸ばして一礼。

眞野「え？」

眞野たちの目の前、背を向けて立って

いる女子大生A。

○女子大生Aの後ろ姿（夜）

に、声が重なる。

塩釜の声「スタイリッシュな身なり」

前菌の声「曲線美は驚愕のそれ」

塩釜の声「ですが、足元」

前菌の声「なるほど」

塩釜の声「あれはまるで」

前菌の声「まるであれは」

塩釜の声「靴を履いている」

前菌の声「否」

塩釜の声「靴に履かされている」

前菌の声「我々の目は誤魔化せない」

塩釜の声「彼女は恐らく」

前菌の声「地方出身」

塩釜の声「生まれは岐阜」

前菌の声「上京したての新生」

塩釜の声「オシヤレはまだまだ」

前菌の声「勉強中」

塩釜の声「挑戦したいアルバイトは」

前菌の声「カフェテリア」

塩釜の声「しかしスタバはハードルが高い」

前菌の声「だから彼女がチョイスするのは」

塩釜・前菌の声「タリーズ」

塩釜の声「東京の女への第一歩」

前菌の声「乞うご期待」

○各停電車（夜）

うんうん、と頷いている塩釜と前菌。

前菌「塩さん、目の付け所さすが」

塩釜「前菌さんの感性こそ極みの境地」

前菌「どうした？」

眞野「……」

前菌「やってみろ」

眞野「やらないですよ」

塩釜「あちらの女性」

眞野「ちよっと」

○女子大生Bの後ろ姿（夜）

に、声が重なる。

眞野の声「く、黒い髪」

塩釜の声「ですね」

前菌の声「それで？」

眞野の声「良い」

前菌の声「そうじゃない」

○各停電車（夜）

呆れている前菌。

前菌「その程度か？」

塩釜と前菌、眞野をじつと見る。

眞野「お、お二人はー」

塩釜「私達は」

前菌「断じて」

塩釜・前菌「変態ではない」

眞野「自分で言うって絶対変態ですよ」

前菌「自分は聖人か？痴漢野郎」

眞野「してません！」

塩釜「眞野さん、私達と学びませんか？」

眞野「学ぶ？」

塩釜 「あなたは先ほど言いました」

前菌 「女は苦手」

塩釜 「それは理解していませんだけですよ」

眞野 「女性についてですか？」

前菌 「そんなんだから童貞なんだ。眞野さん」

眞野 「ど、どどどどど！？」

塩釜 「落ち着いてください、眞野さん」

眞野 「あれ？どうして僕の名前を？」

ニヤリと笑う塩釜と前菌。

○タイトル 「男は背中を語る」

○会社・オフィス

三原涼子（33）、パソコン画面を睨む。プログラミングのテキストだ。

涼子の横に立ち、横顔を見ている眞野。

涼子 「私の顔に何かついてる？」

眞野 「あ、いえ」

涼子 「ここ、どういうこと？」

眞野 「すみません」

涼子「じゃなくて、どうしてこうなった？」

眞野「消し忘れたんだと思います」

涼子「思います？」

眞野「消し忘れました」

涼子「直す」

眞野「はい。すぐに」

涼子「あとその注意力不足の脳ミソも」

眞野「……」

涼子「おっとこんなこと言ったらパワハラだ。

心に留めておこう」

眞野「……」

榊原（51）と和久（42）が来て、

榊原「いいじゃないの涼子ちゃん」

涼子「ちゃん付けやめてもらえますか？」

榊原「眞野くんも悪気はないんだから」

和久「ついうっかりなんて誰でもあるよ」

涼子「お静かに願えますか？ウチの部の問題な

んで」

○同・男子トイレ

横一列で小用を足す3人の後ろ姿。

眞野「全然留まってないですよ。だだ漏れですよ。完全なパワハラですよ」

榊原「おっかないよね。涼子ちゃん」

和久「おっかないです。美人ですが」

眞野「確かに仕事はできますけど」

和久「あんな言い方しなくてもだよ」

榊原「言いたいことは言った方がよいよ」

和久「女で若くて課長だからって」

榊原「君が言うの？」

和久「課長って私と同じなんですよ？」

榊原「君、まだ課長だったの？」

和久「え」

榊原「しかし理解に苦しむよね」

和久「どうして女性ってあんなんでしょう」

眞野「本当ですよ」

榊原「ちよつと。こっちにハネてるよ」

和久「すみません、うっかり」

○走る各停電車・外観（夜）

塩釜の声「毎日毎日」

前菌の声「肌を陽に焼いた」

塩釜の声「きつと彼に会う為」

前菌の声「海辺の町へ」

塩釜の声「それが彼女の夏」

前菌の声「大人になった夏」

○各停電車（夜）

女子大生の後ろ姿を見ながら座ってい

る塩釜・眞野・前菌。

前菌「身も心も焦がした夏が」

塩釜「彼女の糧とならんことを」

余韻に浸っている塩釜と前菌。

眞野「（やっぱり変態だ）……」

塩釜「やっぱり変態だ」

眞野「！」

前菌「なんて思っただろ？」

眞野「……いえ」

前菌「理解したいんだろ？」

塩釜「だから再びこうして来られた」

眞野「でも妄想してるだけですよね？」

塩釜・前菌「……」

眞野「ですよね？」

前菌「全ての創造物は妄想から生まれる」

塩釜「理解とは、頭の中に新しいイメージを

創造すること」

前菌「これ即ち妄想が理解を生み出す」

眞野「今考えましたよね？」

前菌「グダグダ言うな！」

塩釜「さあ、あちらの女性です！」

眞野「え、まだ心の準備が」

○女子大生Cの後ろ姿（夜）

に、声が重なる。

眞野の声「カジュアルな服」

前菌の声「見たままだろ」

眞野の声「髪が」

前菌の声「髪が？」

眞野の声「黒の方が良い」

前菌の声「お前の願望など知らん！」

眞野の声「う、うなじが！」

前菌の声「うなじが？」

眞野の声「男心をくすぐる、とか」

塩釜の声「ほほう」

○各停電車（夜）

感心している塩釜と前菌。

前菌「うなじか」

塩釜「ここであなじに着目とは」

前菌「確かにベタ」

塩釜「我々も初期に通った道」

前菌「だが」

塩釜「一周回って」

塩釜・前菌「良い」

前菌「こいつ、できる」

塩釜「実は以前にもご経験が？」

眞野「（キツパリ）ないです」

○会社・オフィス

自分の席で資料を見ている涼子。

髪を後ろで束ねていてうなじが見える。

涼子の横に立っている眞野。

うなじを見て、

眞野「良い」

涼子「何？」

眞野「あ、いや、その資料良いなど」

涼子「自分で作って自分で褒めるの？気持ち

わるっ」

眞野「……」

○女子大生Dの後ろ姿（夜）

に、声が重なる。

塩釜の声「ただの身体のパーツに非ず」

前菌の声「向かい風に耐え」

眞野の声「前に踏み出す」

塩釜の声「そのエネルギーの元」

前菌の声「それが」

眞野の声「ヒラメ筋」

ふくらはぎにフォーカス。

塩釜の声「辛い時に」

前菌の声「踏ん張り」

眞野の声「頑張る為の」

眞野・塩釜・前菌の声「ヒラメ筋」

○会社・オフィス

資料を見せながら上司と話している涼子。

涼子「ここの仕様ですが、見直しの必要が」

上司「先方の要求だからね。厳しいと思うよ」

涼子「営業に確認してください」

涼子の後ろに立ち、涼子のふくらはぎを見ている眞野。

眞野には両足が踏ん張っているように見える。

眞野「頑張れ」

涼子「上司に向かって頑張れ？」

眞野「すみません」

○各停電車（夜）

並んで座っている塩釜、眞野、前菌。

眞野 「確かに僕が悪いですよ？」

前菌 「だな」

眞野 「でもどんどん上司からの心象が」

前菌 「悪くなってるな」

塩釜 「由々しき事態」

眞野 「どうしてくれるんですか」

前菌 「焦るな」

塩釜 「焦りは禁物です」

眞野 「焦りとかじゃないです。余計に問題が増えてて、これってお二人のせいじゃないかっていうー」

前菌 「次はあっちの女子大生だ！」

3人、女子大生に向かって礼。

### ○居酒屋（夜）

長い髪を靡かせる千葉みなみ（24）。みなみを囲んで男性社員たちが盛り上がっている。

隅の方でノンアルコールを飲む眞野。周りに合わせて笑い、相槌をうつ。

× × ×

だいぶできあがった社員たち。

眞野、こっそり帰ろうとする。

みなみ「帰るの？」

いつの間にか隣にみなみ。

眞野「千葉さん！？」

みなみ「眞野くんっていつもひとりだよね」

眞野「……」

みなみ「飲み会は苦手だけど、断れなくて来

ちゃってでもやっぱり馴染めない系？」

眞野「……」

みなみ「みなみ、参加する努力は買う」

眞野「どうも」

みなみ「いいよ」

眞野「千葉さんは」

みなみ「なんでみなみにさん付け？尊敬？」

眞野「習慣といえますか」

みなみ「なんで敬語？同期だよ？みなみ世代」

眞野「住む世界が違うと言いますか」

みなみ「隣にいるよ？」

眞野「ここには見えない壁のようなものが」  
みなみ「私はよく眞野くん見てるよ？」

眞野「そうですか……え？」

「みなみちゃん」と男性社員に呼ばれ、みなみは戻っていく。

社員「みなみちゃんはどんな男がタイプ？」  
みなみ「えっとね、みなみのことを理解してくれる人」

眞野「……」

一瞬の間。

次の瞬間「俺みなみちゃんのタイプじゃない！」「俺もだ！」「結婚して！」と盛り上がる男たち。

みなみ、こっそり眞野にウインク。

眞野「！」

隣の男のビールを奪って一気に飲む。  
そしてむせる。

○各停電車（夜）

眞野、集中して座席に腰掛けている。

その様はまるで試合直前、ロッカールームのスポーツ選手。

眞野「まだか……女子大生はまだか……」

塩釜「なんという集中力」

前菌「何がこいつを突き動かす」

眞野「カモン……女子大生よカモン……」

○会社・オフィス

座っている涼子。

涼子の横に立っている眞野。

涼子「例えば、君が私の立場だとしよう」

眞野「僕が課長」

涼子「君が部下の私に仕事のお願いをした」

眞野「よろしくな」

涼子「そして頼んでいたものができた」

眞野「よくやったぞ」

涼子「しかもできたものは先方の要求するもののレベルを上回る」

眞野「やればできるじゃないか（照れる）」

涼子「不測の事態に備えてのことだろう」

眞野「そういうのもっと出してこ（得意げ）」

涼子「君なら部下になんと声をかける？」

眞野「偉いぞ、昇給だ」

涼子「……」

眞野「——は言い過ぎですね。褒めすぎはよくありません」

涼子「私だったらこう言う。すぐにクオリテ  
ィを落として」

眞野「落とす？」

涼子「これは先方の求めているものじゃない」

眞野「え、でも」

涼子「何？」

眞野「いえ」

涼子「はつきり言いなよ」

眞野「……」

涼子「めんどくさい。納得できないんでしょ  
眞野、コクリと頷く。

涼子「けどそんなことどうでもいい」

眞野「（カチン）」

榊原「まあまあまあ」

和久「リラックス、リラックス」

いつのまにか榊原と和久。

榊原「落ち着いてりよー」

涼子「ちゃん付けしないでください」

榊原「三原課長」

○同・男子トイレ

並んで小用を足す3人の後ろ姿。

榊原「言い方がまどろっこしいよね」

和久「若くて女性で課長だからって」

眞野「やっぱり理解できません」

榊原「ところで何か情報掴んだ？」

眞野「いえ、全然」

和久「なかなか尻尾をださないですね」

榊原「引き続き頼むよ眞野くん。君が頼りだ」

眞野「任せてください！絶対みつけます！」

和久「そう言ってもう3ヶ月だが？」

眞野「すみません、必ず」

和久「部長が必死に営業してとってきた仕事  
にどれもイチャモンつけて、社内会議では

ねのけた！」

榊原「過去のことだよ」

和久「ですが部長」

榊原「まあ少しだけ、涼子ちゃんには黙って

欲しいとは思うがね」

和久「黙ってもらいましょう！」

眞野「……」

榊原「ハネてるよ」

和久「すみません、うっかり」

○同・オフィス（夜）

眞野、目を見開き涼子を観察する。

涼子、一人で残業している。

眞野「……」

○道（夜）

眞野、一人で歩いている。

眞野「簡単に見つからないよ、上司のゴシツ

プとか」

スマホで検索するも、

眞野「ツイッターもインスタもやってない」

目の前に直立する涼子の幻が見える。

どこか不機嫌そうな顔だ。

轆轤を回すみたいに手を動かして涼子を後ろ向きにする。

眞野「馬の尻尾のように束ねた髪。まるであれは。あれはまるで」

みなみ「ポニーテール？」

眞野「そう、ポニーテール！」

いつの間にかみなみがいる。

眞野「うわっ！」

みなみ「ポニーテールが好きなの？みなみ、

ポニーテールにしようか？」

眞野「千葉さんなんでここにいるんですか」

みなみ「ねえ、みなみ世代」

眞野「ちばちゃんよお」

みなみ「（ムスツとした顔）」

眞野「すみません。さじ加減が」

みなみ、眞野のスマホを奪い、パパッと何かを入力。

眞野「あの」

みなみ、スマホを返す。

みなみ「みなみ、待ってる」

みなみの連絡先が入力されている。

眞野「え?!」

○各停電車（夜）

並んで座っている塩釜・眞野・前菌。

塩釜「ほほう、連絡先を」

前菌「妄想じゃないのか？」

眞野、スマホを前菌に渡す。

眞野「どうです？」

前菌「現実じゃないか」

塩釜「ですが連絡は取っていませんねえ」

眞野「僕のタイミングがあるんで」

前菌、スマホをパッと操作。

高速で何かやりとりをしている。

眞野「勝手なことしないでくださいよ」

塩釜「先日仰っていた上司の方」

眞野「はい」

塩釜「どのような方なのです？」

眞野「仕事はできるし、指示も的確です」

塩釜「どこが問題なのです？」

眞野「……もっと言い方とか」

塩釜「言い方」

眞野「普通にしてくれれば」

塩釜「眞野さんにとっての普通とは？」

眞野「えっと」

塩釜「上司の方に普通でお願いしますとお願い

いは？」

眞野「……いえ」

塩釜「人は勝手に人に期待するもの。そして

勝手に裏切られて、勝手に喚くのです」

眞野「……」

塩釜「責めているわけではありません。これは

自戒です」

眞野「自戒？」

前菌「来週空けとけよ」

眞野「はい？」

スマホを見ると、やりとりを経てみな

みと遊ぶ約束が取り交わされている。

眞野「デート?!」

前菌「みなみ、期待してるってよ」

眞野「心の準備が」

前菌「一週間あれば準備できんだろ」

眞野「いや、女の子とデートだなんて」

塩釜「しようがないですね」

○女子大の点描

教室、廊下、食堂、中庭――

いたる所、隅々まで女子大生ばかり。

前菌の声「ついで」

塩釜の声「来てしまった」

○女子大・正門前

要塞のようにそびえたつ正門と外壁。

つけひげや帽子で教授に変装した塩釜

と前菌、そしてかばん持ちの眞野。

前菌「いつも来てもらえばかりじゃな」

眞野「本当に行くんですか」

前菌「ビビってんのか？」

塩釜「私たちも初めてです」

前菌「塩さん、オレ武者震いしてる」

眞野「何もこんなことしなくても」

前菌「全てはお前の為」

塩釜「デートの為」

眞野「とか言って本当は自分達が入ってみた

いんでしょう？」

沈黙。

塩釜「ここが打って付けなのです」

前菌「打って付けだ」

眞野「凶星」

前菌「腹を括れ、童貞」

眞野「だからなぜそれを！」

前菌「わかる」

塩釜「わかります」

前菌「大丈夫、変装は万端だ」

塩釜「さあ、いきましよう」

○同・中

走る警備員。

追われる3人。

○同・教室（夜）

明かりは点いていない。

教室の隅で身を寄せ合う3人。

眞野「お終いだ」

塩釜「万全なはずだったんですけどね」

前菌「どうしてこうなってしまったか」

眞野「そもそも侵入することが間違いです」

前菌「男たる者、常に挑戦だ」

眞野「なんでそんな余裕なんですか」

前菌「いざとなりやプランAがある」

眞野「プランA？」

塩釜「徘徊老人です」

前菌「練習もしてある。バッチリだ」

眞野「僕はどうすれば？」

塩釜・前菌「……」

眞野「お二人と関わってからろくなことが」

塩釜「私は楽しいですよ」

前菌「いつも二人じゃな」

眞野「奥さんとかは」

沈黙。

眞野「（察して）あ、すみません」

前菌「勝手に殺すな。死んでない」

眞野「え、じゃあ」

警備員「そこで何してる？」

教室の入口に立ち、ライトを向ける。

そして腰の警棒に手をかける。

眞野「あ、えっと」

前菌「ここはどこじゃ」

塩釜「私の家はどこじゃ」

○同・廊下（夜）

猛ダッシュする眞野、塩釜、前菌。

ライトの光を揺らしながら警備員が追

ってくる。

警備員「待て！」

眞野「お終いだ」

塩釜「盛り上がってきましたね」

眞野 「トイレ！トイレに入りましょう！」

× × ×

トイレ前。女子トイレのみ。

眞野 「あっちにもトイレが！」

× × ×

やはり女子トイレ。

眞野 「……」

× × ×

逃げる3人。

追う警備員、数が増えている。

○同・部室（夜）

暗闇の中、部屋の奥にある棚の裏で息を潜める3人。

警備員たちは通り過ぎていったようだ。

眞野 「逃げられなくなる前に行きましょう」

塩釜・前菌 「ええ」

眞野 「バレたらどうするんですか」

前菌 「プランBだ」

眞野 「まだそんなこと言ってるんですか」

パッと電気が点く。

3人「！？」

部活後の女子大生たちが入ってくる。

眞野「ここって」

女子大生たち、服を脱ぎ、下着姿に。

塩釜「ドラマ等でよくある展開かと」

前菌「こういうのを待ってたんだよ」

塩釜「語ってみますか？」

眞野「ダメです！」

前菌「ビビんなよ」

塩釜「透き通るような素肌」

眞野「語るんですか！？」

塩釜「綺麗ですよね」

眞野「終わった。そして変態だった」

塩釜「眞野さんも上司の方にあんな格好で怒られたら、怒りも湧いてこないのでは？」

眞野「まあ」

塩釜「男とは実に単純」

前菌「そして女は複雑」

眞野「確かに」

塩釜「でも美しい」

眞野「……」

前菌「みなみ、大切にしろよ」

眞野「ただ遊びにいくだけですからね」

前菌「告白しないのか？」

眞野「し、しませんよ」

前菌「ビビってんな」

眞野「物事には順番というものが」

前菌「ダメだったなら、また次にいけばいい」

眞野「どんな女性経験してきたんですか」

前菌「マネはすんなよ？二度と会えない別れ

方をした女、一人や二人じゃないぜ？」

眞野「そうですか」

塩釜「私のマネもダメです」

眞野「ええ？！」

塩釜「若い時分の話です」

眞野「それで今、ご家族は？」

塩釜「子供はすでに自立を。家内は出ていき

ました」

眞野「……」

塩釜「ただ、もう一人で生きたいとだけ」

眞野「……」

前菌「同じ説明になるから俺のは割愛な」

眞野「……」

塩釜「ドラマなどでよくある話」

眞野「理由は」

塩釜「わかりません」

眞野「わからない？」

塩釜「はい」

眞野「でも絶対理由が」

前菌「静かに！」

女子大生が近づいてきていた。

バレていない。

眞野「ふー」

前菌「これだからDは」

眞野「童貞って言うなー！」

思わず立ち上がってしまう。

眞野、女子大生たちと目が合う。

眞野「あ」

前菌「プランBだ」

塩釜「やむを得ません」

塩釜と前菌、女子大生たちにすがり

前菌「助けてくれ」

塩釜「誘拐じゃ」

前菌「（眞野を指し）あいつが犯人じゃ」

眞野「……」

○同・外観（夜）

変態ー！男ー！Dー！等の叫び声が響く。

○同・廊下（夜）

走る3人。

追う大勢の警備員と女子大生たち。

○同・中庭（夜）

警備員や女子大生たちがライトを手にあたりを搜索している。

○同・表（夜）

3人、塀を順々に乗り越える。

最後に眞野も表の道路に着地。

3人、顔を見合わせ、ハイタッチ。

眞野「（我に返り）いや、ひどいじゃないですか！」

前菌「やむを得なかった」

塩釜「緊急事態です」

前菌「だが逃げ切った」

眞野「恨みますからね」

声「塀を飛び越えたぞー！」

塩釜「では、ここで別れましょう」

前菌「お前はあっちだ」

眞野、塩釜と前菌とは違う方に逃げていく。

### ○繁華街（夜）

走り疲れてぐったりになった眞野。

道端に座り込む。

客引きの女につかまる。

女「お兄さん、ウチの店で飲んでいかない？」

眞野「あ、いえ」

女「一杯サービスするよ」

眞野「大丈夫です」

女「いいじゃないの」

眞野「ほんと、結構です」

女「ね？一杯だけ」

眞野「だからほんとにー」

涼子「え？」

眞野「え？」

アップにした髪、濃いメイク、キヤバ

ドレスを着た涼子だ。

涼子・眞野「……」

「いたぞー」 「盗撮犯を逃がすなー！」

とまだ警備員が走ってくる。

眞野、逃げ出す。

○会社・オフィス（夢）

眞野、みなみに詰め寄られる。

みなみ「信じられない！」

眞野「違います！無理やり連れて行かれて」

みなみ「変態！盗撮魔！変態！D！」

眞野、いつの間にか女性社員たちに全方位を囲まれ、ゴミをみるような目で見られる。

眞野「うわあああああ」

○眞野のアパート（朝）

—という夢。

布団の中で目を開ける眞野。

眞野「…今日も休むか」

時計の針は8時過ぎを指している。

眞野「どんな顔して課長に会えば」

スマホにみなみからメッセージ。

『風邪大丈夫？何か必要なものがあれば言ってね！』

眞野「すみません。本当の理由は言えません」

ピンポーンと呼び鈴。

眞野「誰だろ」

ピンポーンと再び鳴る。

眞野「まさか…必要なもの、それはワ・

タ・シ・で・しょ？的な？！」

ワクワクしてドアを開ける。

涼子「ワ・タ・シなんだけど文句ある？」

涼子が立っている。

眞野「……」

涼子「心の声、ダダ漏れ」

眞野「どうしてここに」

涼子「あれ？風邪は？」

眞野「ゲ、ゲホッゲホッ」

涼子「本当は私に会うのが気まずいからでし

よ？」

眞野「……」

涼子「この子、一日預かってくれない？」

娘の三原りか（4）が前に出る。

涼子「保育園がインフルエンザ流行っちゃっ

てお休みで。実家の母も忙しいし」

眞野「あの」

涼子「良かった。眞野が隣の駅で」

眞野「勝手にそう言われましても」

涼子「このお兄さんの言うこと聞いてね」

りか「大丈夫？」

眞野「え？風邪？あ、うん大丈夫」

りか「じゃなくて私の事、盗撮しない？」

眞野「……」

× × ×

並んでテレビを観ながらアイスを食べる眞野とりか。すっかり仲良くなって  
いる。

○同（夜）

スーパーで買った惣菜などがローテ  
ーブルに並ぶ。

仕事終わりの涼子が合流している。

涼子「だから盗撮？」

眞野「してません。お邪魔しただけです」

涼子「招かれざる客」

眞野「女性を理解するためです」

涼子「（疑いの目）」

眞野「その師匠たちが無理やり」

涼子「無理やり、ね」

眞野「だから僕の意志ではなくて」

涼子「どうせ入りたかったんでしょ？」

眞野「……」

涼子「営業の千葉と良い感じなんですよ？  
なに」

眞野「千葉さんと良い感じではないです」

涼子「これだから男ってやつは」

眞野「でもわかったこともあります」

涼子「何？」

眞野「女性は複雑です」

涼子「複雑？」

眞野「そして美しい。大変魅力的です」

涼子「どんな見解だよ」

眞野「これぞ真理です」

涼子「（呆れて）ほんと男ってやつは」

○道（夜）

眠るりかをおぶって歩く眞野。

その隣を歩く涼子。

眞野「課長」

涼子「何？」

眞野「一昨日のことですが」

涼子「……」

眞野「副業は」

涼子「ダメだね」

眞野「……」

涼子「別に会社に言っても構わないよ」

眞野「理由を教えてください」

涼子「なんであんたに」

眞野「僕は課長が苦手です。すみません」

涼子「知ってた」

眞野「！」

涼子「そりゃわかるよ」

眞野「でもそれは何も知らないからだと思う

んです。何か知れば」

涼子「別に苦手でも良いけど」

眞野「！」

涼子「と言いたい所だけど、今日は世話にな

ったしね」

眞野「……」

涼子「父が倒れた」

眞野「え……」

涼子「母が面倒を見てる。だけど父はちよう

ど会社をクビになったばかりでお金がない」

眞野「……」

涼子「そんなタイミングで前の夫の借金も残

ってることがわかった。以上」

眞野「……なるほど」

涼子「なるほどって」

眞野「会社には言いません」

涼子「榊原部長たちには？」

眞野「！」

涼子「スパイじみたことやってるでしょ？」

眞野「知っててりかちゃんを僕に」

涼子「そんなこと、本当にどうでも良いこと

だから」

眞野「すみません」

涼子「謝ってばかりだね」

眞野「榊原部長たちにも言いません」

涼子「なんで？」

眞野「課長は頑張ってるので」

涼子「上からか」

涼子、笑う。

涼子「でも、ありがとう」

眞野「裏切り者に感謝など不要です」

涼子「私も誰にも言わないでおこう」

眞野「え」

涼子「部下が盗撮魔だなんて知れたら責任問

題だから」

笑う二人。

眞野「（我に返り）だからしてません！」

○眞野とみなみのデートの点描

普通にデートしている二人。

みなみはわざわざポニーテールにしている。

だがそんなに盛り上がりはない。

× × ×

別れ際。

眞野「どうでしたか？今日は」

みなみ「いろいろ考えてくれたのはわかった」

眞野「楽しかったですか？」

みなみ「……」

眞野「すみません」

みなみ「気にしないで」

眞野「なんで僕なんかと」

みなみ「みなみ、自分を卑下する男、良いと思う。むしろ好き」

眞野「いつも男性社員の輪にいますよね。どうしてですか？」

みなみ「……」

眞野「すみません、単純に疑問で」

みなみ「女って自分より可愛い子みたらすぐ寄ってたかって蹴落そうとするの。めんどくさい。だから嫌い」

眞野「……なるほど」

みなみ「本題は？」

眞野「え」

みなみ「一度みなみの感情を揺さぶってから  
の告白。嫌いじゃない」

眞野「え」

みなみ、背筋を伸ばし、

みなみ「どうぞ」

眞野「……」

○会社・オフィス

荷物をまとめている涼子。

社員たちがヒソヒソ話。

社員1「キャバクラだって」

社員2「三原課長が？」

社員3「そりゃクビになるわ」

荷物を持って出て行く涼子。

後を追う眞野。

○同・表

出てくる涼子。

眞野、追いかけてきて

眞野「課長！」

涼子「（振り返り）お、盗撮犯」

眞野「あの」

涼子「会社の誰かに見られたみたい」

眞野「……」

涼子「でも私ばかりに恥じるようなことは一切してない」

眞野「……はい」

涼子「まあ正直、清々してる。めんどくさい奴多いからね、この会社」

眞野「……」

涼子「それに私だったらどこからでも引く手あまたでしょ？」

笑う眞野。

涼子「こないだ差し戻したやつだけ」

眞野「はい」

涼子「先方はそこまでのものを期待していない。今後の運用のことを考えたら簡素なものでも良い」

眞野「……」

涼子「自分の満足なんて二の次。もっと相手のことを考えるように」

眞野「……はい」

○同・男子トイレ

横一列で小用を足す3人の後ろ姿。

榊原「眞野くんのこれまでの協力、感謝する」

和久「感謝する」

眞野「……いえ」

和久「偶然、見てしまつてさ」

榊原「客引き涼子ちゃん」

和久「これだから女つてやつは」

眞野「何か事情があつたのかも」

和久「事情？そんなの関係ない。規則違反を

していたのだから」

榊原「女は自分の事情しか考えられないんだ

から。全く嫌になるね」

眞野「……」

○（回想）会社・表

涼子「仕事蹴った理由？」

眞野「はい。榊原部長がとつてきた」

涼子「ああ、あの二件。一つはうちでやるに

は規模が大きすぎ。もう一つはきつとうちの維持費が相手には負担になる。どっちもウチにも相手の為にもならない」

眞野「……」

涼子「社内会議で役員は納得してたけどね。

営業は怒って聞いてなかったかも」

○元の会社・男子トイレ

榊原「眞野くん、こっちにハネてるよ」

眞野「すみません、つい」

榊原「……まだハネてるんだけど」

眞野「はい。つい」

○各停電車（夜）

並んで座っている塩釜・眞野・前菌。

塩釜「妻はどうして出て行ったのか」

前菌「わからなかった」

塩釜「これは先日お伝えした通り」

前菌「奇遇だが、俺の所も同じだ」

塩釜「わからないなら女性のことをわかりに

いこうと電車に乗りました」

前菌「来る女を片っ端から語ってやったよ」

塩釜「誰かの助言が正しいとも限りません」

前菌「ならば勝手に想像しちまえてな」

眞野「もつと他にわかる為の方法が」

少しの間。

前菌「問題はそこじゃない」

塩釜「違いますね」

眞野「やっぱり語りたかっただけか」

塩釜「結局の所、理解なんてできません」

前菌「女と男は別物だ」

眞野「……」

前菌「理解はできないが、事情はある。これだけはわかった」

眞野「事情」

塩釜「最初にあなたに会った時、この方は私たちと同じだと思いました。事情があることに気がついていない所が」

前菌「靴が脱げた女も、駅員の女たちも、きつと何か事情がある。痴漢野郎が死ぬほど

憎いとか、体調が悪いとか、仕事がめっちゃ忙しかったとか」

塩釜「だからキツく当たったのかもしれない」

○（回想）A 駅・駅員室（夜）

外から窓ガラス越しにこっそり中を覗いている塩釜と前菌。

駅員A「正直に言いなさい！眞野準！」

眞野「だからやってませんって！」

眞野、なんでわかってくれないんだとイライラしている。

塩釜と前菌、不安そうに見守る。

そして互いに頷いて、ドアを開ける。

塩釜「その方、切れ目に躓いてましたよ」

○元の各停電車（夜）

塩釜「それを理解してほしいと思いました」

前菌「だから引き入れた」

塩釜「理解すべきは女性ではなく」

前菌「何かを抱えているということ」

眞野「……」

塩釜「背中を語るも結構」

前蘭「だがいつまでも語っているだけではいけない」

塩釜「語るよりも、思いやるのです」

眞野「……」

○会社・屋上の隅

みなみと冴えない若手社員がいる。

物陰から見ている眞野。

みなみ「みなみのこと好きになった？」

社員「どうして僕なんか」

みなみ「みなみは皆のみなみの」

社員「でも僕は他に好きな女性が」

みなみ「みんなが私を好きになるの。じゃなきや嫌なの。あとはあなたと眞野くんだけなの。ねえってば」

眞野「……」

社員「辛い思いをしたの？」

みなみ「え？」

社員「千葉さんは敵を作りやすそうだし」

みなみ「あんたにみなみの何がわかるの？」

社員「ごめん」

みなみ「いいよ」

社員「でも話は聞くよ？」

みなみ「……」

みなみ、何とも言えない複雑な表情に。

眞野「わかってる人もいるんだなあ」

○A 駅・ホーム（夜）

電車から降りてくる眞野、塩釜、前菌。

前菌「また女子大行ってえなー」

眞野「やめてください」

塩釜「相席居酒屋でもいきますか？」

前菌「俺行ったことないな」

塩釜「実は私も」

前菌「塩さん、俺武者震いしてきた」

眞野「（苦笑い）……」

ふと前方を見ると、人混みの中に涼子  
とりかが楽しそうに話をしながら歩い

ているのが見える。

眞野「ちよつと行ってきます」

塩釜・前菌「？」

眞野、話しかけにいかうと人ごみをかきわけて進むが、切れ目に躓き、こけてしまう。

すると目の前に、座り込んでいるドレス姿の女性2の後ろ姿。

誰も声をかけようともしていない。

眞野「……」

眞野、女性2に後ろから近づき、声をかけようとするが、

眞野「……」

一旦やめて、女性2の正面に回り込む。

眞野「あの」

女性2「……」

眞野「あの、大丈夫ですか？」

女性2「はい？」

眞野「あの、僕で良ければ力になりますから」  
女性2「？」

眞野「あ、いきなりすみません。気持ち悪い  
ですよ。でも、怪しい者じゃありません。  
多少変態ではありますが」

女性2「……」

眞野「綺麗に巻かれた髪」

眞野「整った格好」

眞野「高いヒール」

眞野「なのに」

眞野「こんな所に」

眞野「それはきつと」

眞野「きつとそれは」

眞野「何か」

眞野「事情が」

眞野「あるや、なしや」

女性2「……」

眞野「……すみません」

女性2「……」

眞野「でも、心配で」

笑う女性2。

女性2「なんですかその喋り方」

眞野「これだと言いたいことが言えて」

女性2「気持ち悪いですね」

眞野「……」

女性2「元彼の結婚式なんです」

眞野「え」

女性2「でもここまで来て急に嫌になっちゃ  
って」

眞野「なるほど」

女性2「なるほどって」

眞野「そういうことありますよね」

女性2「わかるんですか？」

眞野「すみません、わかりません」

女性2、笑う。

女性2「女心とか全然わかんなさそう」

眞野「はい」

女性2「あっさり認めた」

眞野「嫌なら無理に行かなくても」

女性2「ううん、いく」

眞野「え」

女性2「見ず知らずのあなたに同情されて、

悔しいから」

眞野「なるほど」

手を振って去っていく女性2。

眞野「……女性とは複雑怪奇」

涼子とりかが眞野を見ている。

二人、眞野に向かってサムアップ。

後ろを振り返ると、塩釜と前菌もサム

アップしている。

眞野、苦笑いしつつもどこか嬉しそう

な顔に。

おわり